

慶応義塾と初期の西洋文学翻訳者

川戸道昭

1

一般に歴史上のものごとの評価には、表面上いかにももつともらしく思われながら、実は根も葉もない虚説にすぎないようなことがよくある。たとえば、明治前半の慶応義塾に関していえば、同校は実学の傾向が強く、その学窓からは日本の近代文学の成立に貢献するような人物はほとんど巢立っていないといった類いの説である。近代文学史関係の書物などを繙いて、よく目にするのは、慶応義塾は西洋の文明や制度、あるいはそれを生み出した思想や精神の輸入にかけては他に一步先んじたものの、こゝと西洋文学の輸入となると、専門の文学教師を抱えていた東京大学はもちろんのこと、後進の東京専門学校などにも大きく遅れをとった、という否定的な論調である。しかし、本当にそうだろうか。同校の出身者に『新体詩抄』の外山正一や『小説神髓』の坪内逍遙に匹敵するような人物は一人も存在しなかったのだろうか。もちろん、そんなことはありえない。学問の専門化が進んだ明治の末年ならばいざ知らず、西洋の言語を通してあらゆる思想や精神を吸収していこうという洋学の全盛時代に、ことさらにある分野の学問だけを避けて通るといふような発想がいかに非現実的なものであったか、当時の資料を少しでも調べた経験のあるものならば直ぐにも理解できるところだろう。とくに進取の気象にみなぎる幾多の俊秀を擁していた慶応義塾が、一人の例外もなく、全学あげてそのような方向につき進んでいったなどという説にはどうしてもくみするわけにはいかないのである。〈文学と縁の薄い慶応〉というレッテルは、〈実学に強い慶応〉という一般に言いならわされてきたことを裏返しにしただけの、根拠に乏しい風説にすぎなかったのではないか。

私が、そのことを強く意識しはじめたのは、明治十年代から二十年代にかけての翻訳文学作品の編集作業に深く関わるようになってからのことである。その頃の西洋文学の翻訳者を一人一人丹念に調べていくうちに、彼らの多くが慶応義塾の出身者であ

るといふ意外な事実につきあつた。それも五人や六人というようなわずかな人数ではない。少なく見積もつても三、四十人はいらる。あるいは別の言い方をすると、当時発表された西洋の翻訳文学作品のおよそ一、二割は、同校の出身者によるものではないかと思われるほどの数である。しかもそのなかには、矢野龍溪、藤田鳴鶴、森田思軒、黒岩涙香というような當代きつての人気作家も含まれている。彼らに共通するのは、いかにも慶応義塾の学風に相応しく、ジャンルにとられない視野の広さと旺盛な好奇心である。シェイクスピアのような古典作家の移植に力を傾けるかと思えば、最新のフランス人道主義の紹介にも率先して当たる、さらにはヴェルヌのSF小説、ボアゴベイやガポリオーの怪奇小説・探偵小説だつて厭うものではない。しかもひとたびその紹介に手を染めるや、彼らは、江湖の読書子の関心を一身に集めずにはおかないほどの魅力に富んだ作品を次々と世に送り出していった。「政治小説」の矢野龍溪、「フランス人道主義小説」の森田思軒、「探偵小説」の黒岩涙香と、いずれもその道を代表するエキスパートなのであつた。明治の人々に文学のおもしろさと可能性を教えるのに彼らほど貢献した人々はいない。

2

わたしは、今、文学の「おもしろさ」ということを言つたが、なぜ慶応義塾の出身者がそのおもしろさを伝えるよき（伝道者）たりえたのかというと、それには一つ大きな理由があつた。つまり、彼らの多くは当時の新聞・雑誌に關係するジャーナリストであつたということである。先に名前を記した、矢野龍溪にしても、藤田鳴鶴にしても、あるいは森田思軒や黒岩涙香にしても、彼らの脳裏にあつたのは、できるだけ読者の興味をそそる記事を満載して売り上げ紙数を伸ばそうというジャーナリスト的発想である。その発想が、彼らをして、当節西洋で流行している「探偵小説」の紹介へと駆り立てる。あるいは、最新の科学技術で駆使したSF小説の翻訳、さらには死刑廃止を訴えた「人道主義小説」の輸入へと向かわせる。さいわい彼らには、慶応義塾で培つた視野の広さと豊かな語学力とが身に備わつていた。その語学力を背景に、持ち前の好奇心にものを言わせて、これはとと思う西洋文学者の作品を見つけ出しては、開化後いくばくもない日本の文壇にそれを紹介していったのである。

彼らのジャーナリストとしての感覚が捉らえた文学作品は、必ずしも時代の流行にそうSF小説や探偵小説、あるいは政治・制度のあり方に一石を投ずる社会派小説ばかりではない。シェイクスピアのようないわゆる古典文学もちゃんとそのレパートリ

ーに加えられていたのである。これは、一般にはあまり知られていないことだが、明治の前半、シェイクスピアの作品を日本の土壌に根づかせる上で最も大きな貢献をしたのは、官学出身の大学教授よりは、むしろ慶応義塾出身のジャーナリストたちであった。たとえば、西南の役の勃発する明治十年、慶応義塾が発行する『民間雑誌』（九八、九九号）には、早くも「胸肉の奇訟」と題する有名な『ヴェニス商人』の法廷の場の粗筋が掲載される。その紹介者が誰であったかは、はっきり特定されていないが（藤田鳴鶴という説もある）、慶応義塾発行の『民間雑誌』に掲載された以上、いずれ同校の関係者であったことは間違いない。明治十年といえ、当時日本における唯一の大学・東京大学が開設された年で、その後のシェイクスピア研究をリードする坪内逍遙なども、いまだその予備門に籍を置く一介の学生にすぎなかった。そんな早い時期から少なくとも慶応義塾出身のジャーナリストの間ではシェイクスピアの物語（おそらくはチャールズ・ラムのそれであったと思われる）が注目され、活字に組まれて雑誌に紹介されるという状況にあったのだ。

そうした福沢門下生によるシェイクスピア紹介の流れは、その後も十年代後半から二十年代にかけてとぎれることなく続いていく。たとえば、その当時シェイクスピアの紹介に寄与した慶応義塾の関係者をいま仮に挙げてみると、藤田鳴鶴、小栗貞雄、仁田桂次郎、渡辺治、板倉興太郎、磯辺弥一郎と、何人ものジャーナリスト・翻訳文学者の名前が浮かんでくる。そのなかでとくにわたしが注目するのは藤田鳴鶴の存在である。藤田は、周知の通り立憲改進黨系の言論人で『郵便報知新聞』を舞台に独自の論説を展開したことで知られるが、シェイクスピアの受容史上においても同じように輝かしい足跡を残した人物の一人であった。彼は、自らが主筆を勤める『郵便報知新聞』にラムの『シェイクスピア物語』を「春宵夜話」という統一題の下に連載する。その第一話「冬物語」が掲載されたのは明治十六年三月のこと。それ以降十八年七月までの間に、同じ『物語』中の八つの話を次々に訳出・紹介していった。詳しい内容は、別に掲げる藤田の略伝で確認してもらおうとして、ここに特筆すべきは、その内の一話「お気に召すまま」の翻訳が、十六年七月に翠嵐先生訳述『仏国某州領主麻吉侯情話』（春夢楼印行）として刊行されたことである。この「西基斯比耶叢書 No.1」というシリーズ名を伴う翻訳書こそは、百数十年に及ぶ日本の長いシェイクスピア翻訳史の中で、文字通り最初の第一歩を刻む記念すべき翻訳書となったものである。残念ながら「西基斯比耶叢書」はこの一冊だけで終わったようだが、藤田の試みがその後のシェイクスピア文学の翻訳に与えた影響は決して小さくない。三ヵ月後には有名な井上勤の『西洋珍説 人肉質入裁判』（『ヴェニス商人』の法廷の場の紹介）が世に送られ、翌十七年五月には坪内逍遙の『該撤 自由太刀

余波鋭鋒』(『ジュリアス・シーザー』の原書訳)が刊行される、というようにその後陸続とシェイクスピア関係の翻訳書の出版が続いていくのである。

もちろん慶応義塾の出身者に与えた影響も少なくなかった。たとえば、『泰西奇談』全四冊(明治十九―二十一年)の翻訳者・仁田桂次郎などはその端的な例である。『泰西奇談』は、藤田の「春宵夜話」と同じラムの『シェイクスピア物語』の翻訳で、当初の計画では「二拾篇ニ及デ全尾トナルベシ」(『泰西奇談 嵐之巻』広告)というものであったが、惜しいかな、四冊を出したところで仁田はこの世を去った。おそらく、中絶した藤田の「西基斯比耶叢書」を引き継いでそれを完結させようという計画であったと思われるが、肺を病んでいた仁田には計画を完結させる余力もなくわずか三十三歳という若さで逝った。その夭折がなんとしても悔やまれるところである。

夭折といえ、もう一人、シェイクスピアの翻訳で注目すべき作品を残した渡辺治も若くしてこの世を去った文人の一人である。渡辺は『大阪毎日新聞』の主筆などを勤めたジャーナリストで、幼少より秀才と謳われ、幾多の俊秀のつどった初期の慶応義塾の中でもひとときわ才学の誉れの高い人物であった。その渡辺が二十五歳のときに手がけたのが『鏡花水月』と題するシェイクスピアの『間違いの喜劇』の翻訳である。注目されるのは、それがラムの『物語』ではなくシェイクスピアの原書からの翻訳であったことだ。体裁も「総て原本の儘を写し」た脚本仕立て。しかも、登場人物の台詞の一片一片は、かつて口述筆記の翻訳を手がけたこともある渡辺ならではの平易な口語文。『明治初期翻訳文学の研究』の著者・柳田泉をして「当時としては出色の成績」と言わしめたほどの出来栄であった。間違いなく本篇は初期のシェイクスピア翻訳文献の中でも一、二を争う傑出した翻訳作品の一つに数えられるものである。残念ながら渡辺のシェイクスピアの翻訳はこの一篇だけで終わり、その後、彼は新聞関係の仕事に精を出す一方、第一回総選挙に打って出て、見事当選を果たす。シェイクスピアの翻訳者と衆議院議員というのも何となく奇妙な取合わせだが、この時代にあつては決してめずらしいことではなかった。そうした幅広い視野と多様な関心に支えられたところが、当時の翻訳文学者の、とりわけ慶応義塾出身の翻訳文学者の大きな特徴の一つであつたといえよう。大変残念なことこの渡辺も、明治二十六年、わずか三十歳という若さでこの世を去った。

これ以外にも、慶応義塾の関係者でシェイクスピアの作品の紹介に努めた人物は何人か挙げられる。たとえば、『コリオレイナス』の原書訳『豪傑一世鏡』を世に送った板倉興太郎(斯波二郎刊、21年)、あるいは日本で最初の英文学関係の講義録である『人肉裁判
法庭の場』

講義録』(国民英学会蔵版、24年)を発行した磯辺弥一郎という具合である。そしてさらに、英語を解さない菊亭香水(佐藤蔵太郎)に『ロミオとジュリエット』の粗筋を話して、^{〔欧州奇聞〕}花月情話』(『函右日報』、明治17年)という翻案作品を書かせた小栗貞雄(矢野文雄の実弟)の例もある。明治前半の翻訳文学界にあって、最も目覚ましい活躍をしたのは、正統な学問の流れを汲んだ大学関係者よりも、こうした慶応義塾出身のジャーナリストたちであった。彼らは、大学という狭い範囲の中でエリート層を対象にシェイクスピア講義を展開していた学者とは違って、広く一般の新聞・雑誌の購読者を相手にシェイクスピア文学の概要を解りやすく伝えることに心を砕いた。それだけに、一般読者にシェイクスピア文学のおもしろさ——少なくともそのおもしろさの一部——を伝えるには、絶大の効果があったと思われるのである。われわれは大学中心の研究の流れとは別に、こうした民間人によるシェイクスピア輸入の重要な経路が存在したことに改めて大きな関心を注いでみる必要があるだろう。

3

以上シェイクスピアの受け容れを中心に慶応義塾出身者の功績を辿ってみたが、彼らが初期の文学界に果たした役割はシェイクスピア文学の輸入・紹介だけにとどまらない。たとえば、グリム童話の紹介においてもまた同じように輝かしい足跡を残した。日本で最初にグリムの翻訳書を出したのは京都西本願寺系の僧侶で、オックスフォード大学に哲学を学んだことのある菅了法であった。彼の訳した『^{〔西洋古事〕}神仙叢話』(集成社、明治20年)には、「シンデレラの奇縁」を含むグリムの童話十篇が訳載され、表紙に掲げられた美しい天使の彩色石版画とともに当時の読者の注目を惹いた。グリムの翻訳は、その後、呉文聡の『八ツ山羊』(弘文社、20年)、上田万年の『おほかみ』(吉川半七、22年)、洪江保の『西洋妖怪奇談』(博文館、24年)、井上寛一の『西洋仙郷奇談』(東陽堂、29年)と続くが、四書のうち上田訳を除く三書までが慶応義塾の出身者による翻訳であったことは注目されてよい。福沢諭吉の『童蒙をしへ草』(尚古堂、5年)、福沢英之助の『訓蒙話草』(同人刊、6年)以来の西洋童話紹介の流れが、呉や菅らによってグリム童話という形で発展的に継承されていったと考えることができるだろう。間違いなくこれも福沢門下生による近代文学界への貢献の一つとみなしていいものである。なお、菅の『^{〔西洋古事〕}神仙叢話』について一言つけ加えるならば、同書の出版に当たったのは、やはり慶応義塾出身の赤坂亀次郎率いる集成社であった。同社からは、吉田熹六の『奸雄の末路』(21年)、渡辺治の『鏡花水月』(21年)と明治前半の重要な翻訳文学書が何点か出版された。翻訳文学の世界においては、集成社は丸善にも

匹敵する重要な書店であった。

以上のこと以外にも慶応義塾の近代文学界への貢献は幾つか存在する。そのうち少し毛色の変わったところを紹介すると、たとえば欧米各国の文学史の輸入である。この方面においても彼らは他の追隨を許さぬほどの赫々たる功績を残した。いま簡単にその概要を辿ってみると、最初にそれを紹介したのは、元長岡藩士小林雄七郎である。彼は明治十年に文部省から『馬爾加馬爾加 日耳曼国史』という翻訳書（原書は、一八六九年ロンドンで発行されたミセス・マルカムの『ドイツ史』）を刊行するが、注目すべきことに、

その下巻の巻末に「日耳曼ノ文学ノ事」が付録として加えてある。わずか十数頁の文章ではあるが、レッシング、ゲーテ、シラーなど主要文学者の業績や作品評価の概説、さらにはドイツ文学が外国文学から受けた影響などにも論説がおよび、近世ドイツ文学の歴史の流れを一通り概観できるものとなっている。明治十年という時代の旧さから考えて、これが日本における西洋文学史紹介の嚆矢となったことは想像に難くない。慶応義塾の出身者の著作には、これ以外に、松島剛の『万国史要』（各国の「著作家」数十名の略伝を含む。春陽堂、明治19年）、洪江保の『英国文学史』（博文館、24年）、同じく『希臘羅馬文学史』（同、24年）、『独仏文学史』（同、25年）、石川黍山の『米国文学史』（『庚寅新誌』所載、24―25年）等、西洋文学の歴史を紹介したものが数多く存在する。というよりは、明治二十年代までの西洋各国の文学史の紹介はすべて慶応義塾の関係者によるものであったといったほうが当たっている。おそらくは同校の歴史重視の教育が文学の方面にも反映されたものと思われるが、それにしても目先の政治や制度の改革に直結しない欧米各国の文学史にまで関心を寄せていった彼らの飽くなき好奇心には頭が下がる。この分野においても慶応義塾の担った役割の再認識がなされてしかるべきところであろう。

以上のことに加えてもうひとつ同校出身の翻訳者のことで是非ともここに触れておかなければならないことがある。それは、翻訳をする際に用いられる文章の問題である。周知の通り、この時代にあつては、話し言葉と書き言葉とが著しくかけ離れるという文学の近代化を押し進める上で大変な不都合が存在した。斯界の先達たちはそうした障害をなんとか克服しようとする工夫を重ねたが、結局その最も有効な方法は傑れた西洋文学の翻訳を奨励していくことではないかという結論に達した。そうすることによって、これからの文学のあるべき姿が見えてくる。そして同時に、新しい文学に相応しい新しい文章の形態が定まってくる。そう考えて、真つ先に「外国美文学の翻訳」を世に訴えていったのは、近代文学の祖・坪内逍遙であった（『早稲田文学』三号）。二葉亭四迷や森鷗外、森田思軒ら当代きつての文学者たちも、逍遙の呼びかけに応ずるかのように西洋文学の好篇を見つ

けては、それぞれの好みの文章に訳出していった。こうした状況の中から、森田思軒の漢文脈に基礎をおく「周密文体」が生まれる。二葉亭四迷の言文一致の文章が案出される。かくして明治二十年代までの翻訳文壇は、日本の文章語のあるべき姿を求めて大家も新人もこぞって知恵と情熱を注ぐという、さながら文章の実験場のような観を呈することになったのである。換言すれば、翻訳文学が「創作文学」以上に必要とされる時代状況がそこには存在したことになる。

このような状況を背景として、慶応義塾の出身者の中からも日本の文章史上に新たな一ページを加える注目すべき翻訳作品が発表される。すなわち、先ほどシエイクスピアのところでも名前の上がった渡辺治の『三英 政海の情波』(渡辺治刊、明治19年)という作品がそれである。この作品のどこが画期的であったかという点、書き言葉と話し言葉の溝を埋める一つの手段として、速記による口訳筆記が採用された点である。その要領は、渡辺が原書(デイズレイリーの『エンディミオン』)の英文をできる限り平易な文章に口訳する一方で、それを傍らに控える速記者・市東謙吉が一字一句、渡辺が口にするままの「音声」を書き取っていくという方法である。その結果得られた文章というのは、一般読者にも大変分かりやすい平易・明快な文章であった。たとえば、その書きだし部分は、「折りしも夏の夕なり、甕瓦を鏢す真日中の炎威は消えて尚蒸熱く夜風を迎ふる頃しもあれ。一紳士正服に上衣着けセント。ジエームス街頭の倶楽部館より出来り……」という具合である。多少の硬さは残るものの、明治十九年という時代のことを考えると、これでも十分に時流を抜いた斬新な訳文であったといえることができるだろう。

注目すべきは、この渡辺の翻訳が契機となつてもう一点、やはり慶応義塾の出身者による大変重要な翻訳作品が発表されたことである。それは益田克徳の『夜と朝』全12巻(速記法研究会、明治22年)という作品である。これは、英国ブルワー・リットンの同名の小説を翻訳したのだが、本書においても益田が口訳した文章を専門の速記者が書き写すという方法が用いられた。益田の訳文を書き取ったのは「速記法研究会」の主宰者として有名な若林■蔵。前例にならつてその書き出し部分を紹介すると、「英国の都会倫敦に程遠からぬ或村のお寺に迦靈といふ坊さんが居りました。勿論村のことですから別にたいした御宗旨の学問のある人が入用といふこともなし、又智識和尚さんが住職になる訳もありません……」というように、渡辺の訳文をさらに易しくした純然たる言文一致の口語体であった。明治翻訳文壇の泰斗・森田思軒は、その序文のなかでこの作品の出現を「我国文学世界ニ一変ヲ生ズルノ朕兆」と受けとめている。後世の研究者の多くも、思軒のこの解釈に倣つて、本篇を日本の翻訳文学の発達史上二期を画す重要な作品と位置づけている(柳田泉『明治初期翻訳文学の研究』参照)。それがいかにこなれた訳文であったかは、

全篇の完結を見ないうちから「猫遊軒伯知子」という講釈師により「夜と朝の講談」として、府下各所の寄席で公演されたという事実からもうかがえる（第10巻の広告）。いずれにしても、明治の文学史・文章史の上で、二葉亭四迷の「あひびき」（二葉亭は三遊亭円朝の講談筆記をもとに、いわゆる「ダ」調を考案した）とならんで、一時代を画す注目すべき作品であったことは間違いない。

このように渡辺や益田は、速記による口述筆記を利用して他に例を見ないような訳文を案出した。しかし、考えてみれば、平易・明快な口語訳というのは、なにも渡辺や益田の専売特許というわけではない。むしろそれは、福沢諭吉以来の慶応義塾の伝統であった。その伝統に則りながら、そこに一工夫加えて口訳の速記という方法を取り入れ、さらに言と文の接近を計ろうとしたところに渡辺や益田の試みの近代文学史上の意味があったということになる。

一方、大変興味深いことに、慶応義塾にはそうした言文一致の平易な文章の流れに真つ向から異を唱える人物も存在した。そこが同校の同校たるゆえんで、輩出した人材の層はかぎりなく厚い。その筆頭に位するのは、先ほど来、再三名前の登場する旧派の「殿将」森田思軒であった。思軒は、他人の物する口語文章には一定の理解を示しながらも、自らの書く文章としては徹頭徹尾、漢文脈に基礎を置く「周密文体」にこだわった。旧文学の伝統の中で文学上の洗礼を受けた思軒にとって、身に染みついた漢文の響きや格調を無視して口語文に走ることなどとうていできないことだったのである。同時にそれは当時の多くの知識人の考えを代弁するものでもあって、彼の旧文体を基調とする翻訳文学が一世を風靡するのもしうした江戸以来の文学の伝統に育まれた無数の知識人たちの支持があったからこそのことである。思軒の盟友・吉田熹六などもそのような旧派の立場を鮮明にする知識人の一人で、彼はブルワー・リットンの小説を訳した『奸雄の末路』（前出）の序文のなかで舌鋒するどく言文一致反対の論陣を張っている。

このように、当時の慶応義塾の出身者には、旧派、新派を問わず数多くの文人・論客が存在し、その人たちがそれぞれの立場から西洋文学の翻訳や独自の文学論・文章論を世に問うていった。そして彼らの発表する文学作品が、そのまま日本の近代文学の潮流を形成していくほど、そこには多彩な才能が蝟集していたのである。多少大袈裟なもの言い方を許してもらえば、日本の近代文学の進展は少なからず彼らの創意と工夫にかかっていたといっても過言ではないのである。

しかし、いつの頃からか、文学というものは「創作文学」でなくてはならない、あるいは同じ「創作文学」でも「純文学」にかぎるといった式のやかましい基準がもちだされ始めると、彼らの試みは、西洋文学の翻訳という枠内での表現形式や文章形態

の模索であっただけに、「創作・純文学」を第一義とする批評家からはまともな取扱いをされなくなっていた。しかしそのようなもの見方は、当時の時代背景を無視したきわめて偏狭な見方といわざるをえない。前にも紹介したように、明治十年代、二十年代というのは、江戸の流れを汲む旧派の文学が大きくものを言った時代である。日本古来の文学や漢文学の伝統によって育まれた人々に、新しい文学の妙味を理解させるためには、当然それなりの手順と段階を踏む必要があった。そのような新文学（＝西洋文学）の段階的普及手段として最も大きな効果が期待できたものといえば、外でもない、西洋の文学を日本の表現形式や文章趣味で味つけすることのできる翻訳文学であった。正宗白鳥の表現を借りるならば、その頃の翻訳文学というのは、「日本流の支那料理、日本流の仏蘭西料理」であったという。泰西の事情に暗い大方の読者にとつて、西洋文学は日本流の味つけをもって初めて口にしようもの、言い換えれば、当時の翻訳文学というのは純然たる洋風でもない、さりとして和風というわけでもない、その折衷のものであったということになる。おそらくこうした翻訳文学に備わる長所が理解されたためだろう、その頃の文壇は、さながら「西洋文学の植民地みたい」な様相を呈していた。若者は自国の小説よりも、外国文学の翻訳作品のなかに、「自己の影を見た。自己の夢を見た。或ひは自己の心に潜んでゐるものを引き出される感じがした」、そうして文学というものが「いかに大なる力を有つてゐるか」を身にしみて感じさせられることになったのである（正宗白鳥「日本文学に及ぼしたる西洋文学の影響」）。逍遙が予見したように、新しい文章の形態もそうした西洋文学を紹介していく中で自ずと定まっていたとみることができる。

このように、日本の文学全体が西洋文学の翻訳に大きく依存していた時代に、いち早く西洋文学の神髄を日本の文学風土に根づかせようと様々な工夫と努力を重ねた文学者、それが二葉亭、鴎外、逍遙であり、同時に龍溪、思軒、涙香に代表される福沢門下の文人たちであった。ということは、慶応義塾の出身者はこの領域においても、眼前に広がる無限の可能性に積極果敢に挑んでいった輝かしきパイオニアであったということになる。すべての学問分野において、その枠組みの見直し・転換が求められている今日、これら福沢門下の翻訳文学者の一群に熱いまなざしが注がれる日が遠からずやってくるものと確信する。

彼らの先見性とパイオニア精神に多大な敬意を払いつつ、ここに慶応義塾出身の西洋文学翻訳者の略伝並びに業績一覧を掲げることとする。